公開講演会記録

渋沢栄一と日本近現代史(1)

職業能力開発大学校名誉教授　工学博士　大川時夫

一、渋沢栄一と実業教育との接点

子爵渋沢栄一氏（以下氏の号、青淵と表記）が指導・斡旋の労を捧げられた企業、事業は数多あるが特徴的な例は大正9年に城北滝野川の飛鳥山別邸・曖依村荘の麓下台地に創立した府立商工学校であったと思える。同校はその後昭和10年に当時北豊島郡板橋村へ移転し、以来1世紀を経て令和2年には創立百年を迎える。幾変転を経て今は都立北豊島工業高等学校となり堅実な校風で卒業生は地元の産業界へ迎えられている。同校の特徴的学風については筆者の報告(1)に詳述した。ここでは、青淵がなぜ現役引退後に実業教育へ力を傾注したのかを追想しながら青淵の人生観を回顧してみた。

青淵の事業家としての感覚は父親、渋沢市郎右衛門について農業実務を体得したことに原点があった。商売人としての素養も子供の頃から米麦などの農産や繭、藍玉などの栽培・加工・販売などを通じて、営業実務も仕事を通じて体得したものであった。形式的に言えば一家を継ぐべく〝一子相伝〟いわゆる厳しい徒弟的訓練と言えるだろう。読書き算盤も父親譲りであり、儒学については近縁の尾高惇忠に師事した。さらに剣術の鍛錬は同じく縁者であった渋沢新三郎について神道無念流の皆伝の腕前であった、この命がけの鍛錬の中で〝筋胆智〟が備わった。彼は筆まめであったが商業簿記の知識は大福帳的なものであったろう。しかし近代金融財務知識と複式簿記的技術はフランスへ出張の際出会ったロスチャイルド系の銀行家、フリューリ・エラール氏に負うところが大きかったと思える。

フランスから帰国後、大隈重信の誘いで大蔵省へ一時出仕し銀行業設立事務などを済ませて退官し、商工会議所を設立し民業開拓へ邁進したが、数多の事業創出には天才的なひらめきがあった。まず現場実務に通暁した人財を発掘し、財務的道筋を立てて、あとは強力な援助を行いつつ事業を推進したのであった。しかし明治8年から同18年まで商業実務者を育成する機関として商法講習所から商業学校を開設する機運に青淵も参画したが、幕末明治初期には周囲環境が整わず難渋した。この経験は後日生かされる。こと

に現場実務者と経営的為政者の間には相互無理解による厚い壁ができやすいのである。青淵は後日欧米の日貨排斥や人種差別に直面し苦闘するが、国内的には上層社会人と下層現場社会実務者の反目を和らげる努力が大きかった。富岡製糸場を開設するとき、事業の企画は大隈重信、伊藤博文と青淵が主唱者であったが、実働部隊は青淵の意を体した場長に、上記の尾高惇忠氏を立て、現場実務者にはフランスから生糸製造の専門家ポール・ブリューナ氏を招聘した。しばしば話題になる現場工女には当初なり手が得られず苦労したが、惇忠の娘〝ゆう〟を皮切りに採用した。後日「富岡日記」(2)で有名な和田英（横田英）なども参加していた。工女時代は上品な職人世界であったが、時代を下り大正、昭和に到ると〝工女〟から〝女工〟になり世俗化した。

二、実業教育の精神と実践

明治5年の学制改革は明治維新の富国強兵思想が根幹となり、外国による植民地侵略を防ぐ国防の観点から国民を訓練する意図があらわに出ていた。一言で言えば国民国家建設である。強い兵隊と強大な武器弾薬の生産力構築であり、賢い生産者の育成である、忠君愛国とも言える。その教育勅語が明治23年に公布されたが、戦後GHQの命令で失効となったが、その民族的意義は生きている。GHQは大和心を持つ日本人が恐怖の的であったので、その精神を産み出す教育理念を抹殺したかった、それがいわゆるオレンジ作戦の真髄でもあった。しかし明治以前はどうかと言えば、農漁村や町場の職人達が生業として縄文時代いらい連綿として伝えてきた一子相伝の徒弟教育があり、それは今現在も依然として寺社大工や和菓子職人などの狭い平和な世界では効力を維持している。それこそ真の伝統的実業教育の理念なのだが、明治期には国民国家建設の建前から教育を大衆的に一般化するべく勅語に纏められたのだ。大東亜戦争敗戦後GHQを支えたグローバリズム的アメリカ共産主義者にはその伝統的理念は元々ないので、GHQのお先棒を担いだ日教組の諸先生には実業教育の何たるかが理解不能になった。漢学では朱子学が物事の性質の考究から理念が生まれるとする唯物的思考傾向を持ち、一方同じ儒学でも陽明学派ではその物事を考える人間の心と体の動きが理念を生むとされる。吉田松陰やその師佐久間象山の行動的儒学は陽明学的方法論である。

さらに実業教育の理念を簡単に言えば、〝お客様が求める品々を、心を込めて造る〟という実践行動の中で作業者の心や技能が育つので、陽明学的と言える。

幕末に松陰や過激な水戸学派の行動的志士が叢生し、その流れで尊皇攘夷運動が高揚したことを思えば日本人には陽明学が好まれたと言える。そうした実務的仕事が実践できる人、それが実業人であり、その教育は生きている生産の場で教える訓育が望まれる。教室の黒板と机の世界で行われる知識偏重の大量人財教育では誠の実業人を産み出すことは望めない。また、日本伝統の実業である〝生業〟は生きることが目的の業務だから金儲けの理念は元々薄い。典型的な例は幸田露伴の作品『五重塔』に見える「のっそり十兵衛」である。必要な品を必要なだけ造ると言う考え方は塵の山を残さないのだが、不特定多数の顧客から金儲けが目的の元祖資本主義者アダム・スミスには想い到らなかっただろう。

今も残るが伊勢神宮の周辺には天皇家へ品々を納める職人や農漁村民が暮らしている。歴史的には公儀供御人と言われた市場経済とは無縁の一群の人達がいた(3)。その地域に住んで暮らす一族が自給自足の暮らしを営んでいたのである。

その生活形態は、必需品は金銭で働かず市場の中で調達したい、とするアダム・スミス流の市場経済人とは異質である。今日的市場経済でも生産と供給の環の中では造り手と需要者の間に日本的な非市場的依存関係がある、余分な儲けはなしで暮らすということである。最大利子、利潤を追求する株式会社流の現代会社法には馴染まない世界がある。

欲深く金銭欲の強い経営者は労働者をただ働きで酷使し利潤を生み出そうとするが、喜んでボランティア活動をする人達の世界には欲得を離れた暮らしがあり、相互に助け合っている世界があるのだ。そうした世界には欲の皮が突っ張った今日的市場人は入れないが、昔から言う〝宵越しの銭は持たない職人気質〟が伝統的日本習俗である。そうした伝統社会で後輩へ仕事の仕方を伝える徒弟的な仕組みを近代的な形に整えた仕事の現場が即ち〝生産実習〟であるが、これを的確に纏めた文章がある。「論学校附製作場」と言う小文で、幕末に外国からの侵略に直面した武士達が国を護る際の人財育成法を考えた結論でもあった。その小文は吉田松陰が残したものだが、そこには幕末の哲学者、横井小楠、佐久間象山、水戸学の藤田東湖達の哲学が反映していた(4)。

三、青淵と松陰

おなじ陽明学的な思想でも実践する人により現実の姿は大きく異なる例が青淵と松陰である。文久3年（1863）春、青淵が24歳のとき儒学と剣術の修行に江戸へ出た。青淵の自伝によれば目的は騒然とした江戸城下で志士達と交わることであった。その10年前、嘉永6年ペリーが浦賀へ黒船4隻で来港し幕府に開国を迫った。以来年を追うごとに日本中が騒然となり、頻々と来港する外国船を危惧し、ことに水戸浪士を中心に騒ぎが拡大した。幕府の弱腰無策を攻める攘夷運動が燃えさかった。その状況は今日の国会議事の堕落ぶりに類似する、重要法案をなおざりにして桜の花見会を喧々諤々と騒いでいる、国民はあきれている有様なのだが、幕末の柳営も同様であったろう、政権も長続すると腐敗するのだ。

万延元年（1860）には桜田門で井伊大老が水戸藩士に斬られ、文久元年（1861）には東禅寺事件が出来し、水戸浪士がイギリス公使を斬る、文久2年（1862）には江戸城坂下門で大老安藤信正が浪士に襲われた。同年、萩藩高杉晋作達松陰の弟子達は横浜イギリス公館を焼き討ちした。青淵も国の不安を案じて一大事件を起こして国政を喚起しようと高杉に追随する形で横浜テロルを企画したのであった。江戸で同志60人ほどを募集し秘密裏に計画を策定し、秋口に横浜を襲撃する手筈とした。だが、周囲の情勢を綿密に考慮して襲撃計画は土壇場で回避され同志は解散し、青淵と部下1名で京都へ遊学することになった。その上京を斡旋したのは一橋家要人、平岡円四郎であった。一橋家は徳川慶喜が殿様であり、青淵の思想は尊皇攘夷から佐幕へと180度転換したわけである。実務家であった青淵が現実を直視し冷静に状況を読んだ結果であろう(5)。

青淵が一橋家へ仕官したのは翌年元治元年（1864）であるが、以来慶応2年（1866）秋までの3年間ほど下級藩士ではあったが青淵の活躍は目を見はるものがあった。まず一橋家御領地の特産品を調べ、殖産振興につとめ産品を大阪・京都へ出荷し営業利益の拡大を図り、藩財政を改善した、この分野は青淵の得意分野であった。次いで領内の農民を集めて高杉晋作の奇兵隊に類して農民兵を編制した、一橋家の近代的防衛力を建設したのだ。これら一連の事業を約3年間

で達成した実績は殿様に高く評価され、殿様への意見具申なども取り上げられることになった。慶応２年に慶喜は第15代将軍になるが、青淵は反対意見を上申していた、幕府に入っても成功はおぼつかないし第一危険でもあると。しかし聡明な慶喜は一大決心をして将軍職を朝廷に返納してしまった、慶応３年10月の大政奉還である。青淵の忠言を聞いた形である、それは正解であった。結果として官軍の幕府への攻撃目標が消滅したからである。在京中青淵は敬天愛人の西郷と国政などで意気投合し、その後、殿の命令で徳川昭武の従者としてパリで開催の第２回万国博へ出張した。その間に国内では鳥羽伏見の戦いが始まり、戊辰戦争が繰り広げられていた。

一方、吉田松陰は早熟の天才であった。生まれは天保元年（１８３０）杉百合之助常道の次男として生まれる。５歳のとき叔父吉田家へ養子にでる。吉田家は山鹿流軍学者の家柄で、９歳で家学見習いとして藩校明倫館へ上がり、10歳で家学を講じた。嘉永元年（１８４８）には19歳で山鹿流軍学者、兵学・儒学師範として独立した。この年、松陰の師佐久間象山は洋式野戦砲を造っていた。嘉永７年（１８５４）３月ペリー艦隊が再来し、日米和親条約が締結される。松陰は弟子金子重輔を伴い米艦でアメリカへ出国を企てるが失敗し、自首して江戸の牢に繋がれる。同年10月萩藩野山獄へ収監、明ける安政２年藩政府は松陰を実家杉家へ預けた。安政４～５年幽閉中に弟子達が集まり松下村塾を塾生ともども〝生産実習〟（当時生産実習と言う言葉はなかった、後日佐藤孝次が創案）にて建設する。塾生として明治維新を推進した元勲である伊藤博文、井上馨、山縣有朋、正木退蔵、久坂玄瑞、他70名ほど集まった。結果から考えれば、松陰は軍学者よりも教育者として成功したと言える。後日、正木退蔵は明治政府の業務でイギリス・ロンドンへ派遣され、留学生の監督や欧州実業教育事情の調査などを行った。その結果が明治13年に文部省管轄の東京職工学校の創立に繋がった。

正木退蔵がロンドン駐在中に小説『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』の作者であるロバート・スティブンソンと懇意になり、吉田松陰と松下村塾の話を克明にしたらしい。感動したスティブンソンは〝Yoshida-Torajirou〟とした随筆を残している。今も氏の全集に見ることができる、そこには松下村塾の有様が生き生きと描かれている。

東京職工学校は隅田川縁の東京浅草蔵前の米倉跡地に建設された。初代校長は上述の正木退蔵が就任した。漢学の授業は正木が担当していた。初期の実務授業には現役の大工職人などが担当した。筆者の生家は蔵前校舎の脇で浅草通りに面していた商家であったので学校の噂話を親兄弟などがしばし語っていたことを記憶している。大正12年の震災で消滅するまで職工学校の評判は日増しに高まり、震災の頃は校名が東京高等工業学校となり、付属徒弟学校なども併設され、松陰遺訓の学風が残されていた。震災後、同校は目黒区大岡山へ拡張移転し東京工業大学に昇格した(6)。

四、製作学教場と工部大学校

今日実業教育機関として見渡せば、公私著名なものが多数あるが、明治初期に発足した代表的な実業教育機関は開成学校（南校）の付属施設として明治７年に開設された製作学教場と工部大学校を挙げることができる(7)。製作学教場は現場大工や窯業などの実務者が勉強する場であったが、南校が東京大学に発展するには不適当という判断から明治10年に廃止されるが、明治17年には東京職工学校

（後日の東京工業大学）へ移管された。ドイツ人化学者、ゴットフリード・ワグネルが窯業の教鞭をとっていたが、同氏は施設と共に東京職工学校へ移籍し、日本の窯業界の発展に大きく寄与したことで知られている。ちなみにワグネルは明治25年に他界し、東京青山霊園で永眠している。彼の業績を顕彰する銅像が東京工業大学、京都府立図書館、および九州JR有田駅にある。

　工部大学校は明治4年（1871）に工部省が虎ノ門に設立した工業仕官の教育施設として開校した工学寮が始まりで明治10年に工部大学校となり明治19年には学制改革で東京帝国大学工学部となる。企画者は文久3年に渡欧した長州五傑の2人、伊藤博文、山尾庸三で校長はイギリス人ヘンリー・ダイアーであった。五傑の内、伊藤と井上馨は渡欧後すぐに国内問題が理由で帰国するが、山尾はグラスゴー大学で造船実務を学んだ、そして同大学ランキン研究室に在籍していたダイアー氏をスカウトしたのであった。

　学科は英語が日常的に使用された。雇い外国人教授が講義し全員寄宿舎生であった。学科は予科2年、専門科2年、実地科2年の都合6年であった。著名な卒業生はジアスターゼの高峰譲吉、電気工学の藤岡市助、建築の辰野金吾らが有名である。それぞれ日本の近代化に貢献された。帝国大学に吸収されてから実技部分は簡略化され、アカデミズム化が進んだことは一面では喜ばしいが実技軽視の側面も生まれたのである。これらの実業教育機関発足の事情を眺めて見ると松陰の弟子達、長州閥が活躍している風景が見える、山尾は松陰の直接の弟子ではなかったが、松陰の畏友、木戸孝允の弟子筋であった。

五、科学・技術・技能の鼎立と外来文化の考察

　慶応2年暮れに欧州へ出かける前、青淵が京都在住の際に西郷南州と極めて親密に歓談したことがあった(8)(9)(10)。巨人同士の話しであるからさぞかしスケールの大きい内容であったと想像できる。例えばキリスト教文明と我が大和文化の衝突などの話しに発展していたのではないかと想像したい。既に寛永14年（1637）に島原の乱があり、九州ではキリスト教に関わる不祥事は山ほどあったので南州はその現実、異文化対立の困難性を知りすぎるくらい承知していたであろう。その後明治6年2月にキリスト教布教は解禁になり、同年9月に欧米調査の岩倉使節団が帰国した。帰国後ふたたび征韓論が再燃し、論陣破れて西郷、板垣、江藤達参議は朝議を辞して下野した。筆者にはこの議論がブラーフ（blah・たわごと）に見えるが別稿で論じたい。異文化異文明との対立は様々な分野で今日も問題を醸している。

　青淵がスエズ運河工事現場に遭遇した際気づいた事業創出資金調達への疑問、さらに高位の人との対話が平易に行えることが和文化とは著しく異なることへの感動など、後日の宿題として残った。ここでは生業の在り方の違い、維新いらい欧米的暮らし方が怒濤の如く青淵達の頭上に襲来したこと、科学的思考と生産現場の方法、日常手仕事の有様について考察してみる。

　科学（science サイエンス）的思考が欧州からやってきてまず大学などの高等教育機関に定着した。論理的思考で物事を分析し、純粋簡単な方法で再現性を実証することを繰り返し、人間社会に有用な方法・思考を構築する学問と言える。例えば医学では病気の原因を探求し治療法を構築する、例えば野口英世の伝染病研究、大森貝塚を発見したエドワード・モースの考古学的研究など。

機械技術（technology テクノロジー）では蒸気機関を発明したジェイムズ・ワット、内燃機関を工夫したルードルフ・ディーゼル、工作機械の母と言われる旋盤を発明したヘンリー・モーズレイらが有名な外来の科学・技術者としてあげられる。その他枚挙に暇がない多数の新来文化がある。機械技術を工学と呼んだ嚆矢はH・ダイアーであった。

技能職人（artisan アルティザン）、日本古来の伝統的技能の場で、農漁民・街場職人の世界、勘・コツで成り立つ世界である。自給自足経済の場面であり、欧州中世的でもある。

科学的業務に携わる人を仮にAとし、技術的業務に携わる人をBとし、職人的業務に携わる人をCとすると、A、B、Cの人達は互いに尊敬すると同時に軽蔑し蔑む傾向がある、AはBを油臭いと言いBはAをかび臭いと言い返す、CはAを青びょうたんと言いAはCを褌担ぎとあざける。A、B、Cは互いに肘を突っ張り合うと同時に独立・鼎立し競争関係を持っている。明治以降従来我が国にない異質のA、Bの生活空間が顕著に日本に出現した。

そしてA、B、Cそれぞれが徒党を組んで集会を開く。AとBは学協会と言い、Cは協会・職人会と言う。そして年2回程度の大会を催す。会議では構成員のそれぞれの発表があり、散会後は食堂にあつまり飲食を共にし、アルコールを召して気勢を上げるのを常にしている。大会では宣言文などが公表されることがあり、マスコミ機関の話題になることもある。

日本社会では学会の親玉に、日本工学会という機関が明治12年に発足した。工部大学校のH・ダイアーが主唱者だった。その後下部組織に多数の諸学会が生まれ、現在では約400ほどの登録機関がある。学会は参加者の会費と会所属の学校、会社などが協賛金を提供して運営されている。Cの世界では昔から手工業組合とか職人連盟などがあり、特にヨーロッパでは職人の権利維持・保険などの活動が行われ、宗教団体の慈善活動に付属していた例もあった。欧米諸国でも産業革命以降、新奇発明や考案が莫大な利益に繋がることが多いので会社・企業が積極的に研究機関へ投資する場合が増えた。

利益・利潤に聡い金持ちは喜々興奮しながら研究投資をするに違いない。新案特許事務などが19世紀から始まっていた。新奇考案を事業化する投資家も逐次増えた。新奇事業は投機的意味合いもあるので経済的リスクは当然存在する、したがい事業開始には度胸と胆力が不可欠である。研究員を雇用する学校や会社が増加したのは19世紀以後の特徴で国民国家が発展して国力増進を期待する意味があった。欧州諸国の昔は教会の修道院などで修道僧などが研究していた。実用的にはチーズやバターを造るとかワインの醸造などから化学研究が始まり、鉛を金に換える（これは実用には成らなかった）錬金術などから原子化学などが修道院で行われていた。欧州諸国は気候的に安定していたので、このような長閑な暮らしができたと思える。新奇研究には長閑で裕福な環境が不可欠で、大概は大学の研究コースか大会社の研究室がその場所と資金を提供している。欧米でも19世紀までは大学の学部は神学・宗教学が主体で科学・技術は殆ど相手にされていなかったのである。

一方天変地異の多い島国日本では何故かA、Bなどの研究生活は育たなかった。農業世界で生まれた金持ちや宗教家はいたし、お酒の醸造などは発展したが、肉食が流行らないのでバターやチーズの生産は明治以降にならないと一般化しなかった。大量にこしらえて儲けるという発想がそもそもなかった。力学や電気学の理論主導の分析的科学は生まれなかった。せ

いぜい思い出せるのは平賀源内（1728～79）であるが、あまりに奇抜だというので禁止され処罰されて終った。江戸時代にからくり人形が大衆娯楽の興業に見られたし、時計なども長崎出島経由で伝来してはいたが、軍事的技術には発展していない。新奇技術はヨーロッパでも魔女狩りなど魔術的な錬金術師などは処罰されたので日本だけの偏狭さではない。

日本社会で科学の発展が遅れたのはやはり天然自然の厳しさが裕福な研究を受け付けなかったことが根本的理由ではなかろうか。他面、縄文以来の美しく静かで平和な世界では欧州世界に比べて破壊的武器などの発展の必要性が少なかったことも理由であろう。せいぜい日本刀と芸術的鎧兜が発展したのに止まっていた。それに青淵がスエズ運河を通らなかったならば射幸的人間を育てて起業に邁進することもなかったかも知れない。明治以降の日本でA、Bの如き新文化を産んだ理由は黒船的軍事威喝の恐怖からではなかろうか。維新いらい衣服の変化も顕著で、洋服は活動的だが和服の優雅さがない。単に生産現場や戦場で便利だと言う理由で洋服が普及したのではないだろうか。逆に見れば戦争や大量物財生産の必要がなければ窮屈な洋服の必要はないのである。

六、もう一つの実業教育機関

維新後は産業従事者と国民軍拡張のための兵員を確保するために国民の教育が不可欠であった。明治5年8月に学制が公布され、大中小学区が決まったが当初は生徒が集まらなかった。明治12年にさらに工夫されて教育令が発令され中央集権化が進んだ。

明治32年には実業学校令が公布され予算処置（実業教育国庫補助法）もあり、全国的に実業教育機関が整備された。その頂点に東京職工学校が位置づけられ実業教育の全国ネットが敷かれていた。当時は東京職工学校から昇格した東京工業学校に改められ内容も逐次高度化していた。しかし新卒者対応だけでは産業界との対応が足りないので在職者教育の需要が求められていた。明治初期の岩倉調査団に通訳として随行した手島精一氏は後日職工学校2代目校長になるが、調査団に随行してドイツのマイスター・スクールを参観、それを模倣して全国的に実業補修校制度を取り入れた。当時東京蔵前にあった東京高等工業学校が、現場職人の教育訓練を全国的に統括していた。即ち実業学校、実業補修学校、徒弟学校などがその傘下に纏められ、教員は工業教員専門コースで訓練され全国へ派遣されるシステムができていた。大正12年の関東大震災で蔵前の東京高等工業学校は壊滅的打撃を受けたが、目黒区大岡山へ移転し再建された。

震災の破壊を復旧するための建築大工が不足していた。当時内務省外局に厚生・医療を管轄する部門があり、その一部に労働者保護条例規定が工場法（大正5年実施）として公布されていたので何とか間に合い震災復興のため緊急的に速成訓練を実施し建築労働者の供給を行った。これが、その後厚生労働省が職業訓練に参加するきっかけとなった。そのとき講師として採用されたのは東京高等工業学校の教授や講師、そして現場の建築専門家が参加していた。工場法はその後労働基準法の技能者育成条項へ拡張され、現在は産業界の進展に伴い時代の要請を受けて職業能力開発促進法に発展している。職業訓練が全国的に組織化され、教育訓練は職業能力開発総合大学校を頂点として全国組織が仕組まれ、末端は技能開発センターが担当することになっている。しかし依然として教師・講師の不足があり、東京工業大学の協力を戴いている。

東京工大が兄貴分で職業訓練大学は弟分の形が続いていると言える。と言う訳で日本の職業訓練の基本精神は依然として吉田松陰の「論学校附製作場」から外れてはいないのである。

七、富岡製糸場と王子製紙

青淵が明治政府に出仕してまもなく官営の機械製糸工場を建設したいとする意見があがった。大隈重信・伊藤博文と青淵はフランス公使館へ相談し製糸技術者ポール・ブリューナ氏を紹介された。早速計画が進み所長に青淵の義兄で儒学師範であった尾高惇忠を据えて群馬県富岡へ工場を建設することが決まった。明治5年11月4日に官営富岡製糸場は操業を開始した。工女を募集することが難事であった。明治6年1月には４０４人の工女がいたが、旧士族の娘達が集められた。当時の記録は和田英（横田英）の〝富岡日記〟に詳しい。

明治6年大蔵省官吏を退官した青淵はイギリス人工場建築技師1名、アメリカから製紙技術者1名を雇った、製紙機械はアメリカから購入した。機械が到着したのは明治7年頃、工場は王子の飛鳥山崖下の湿地を整地して建設。製紙には大量の水を使うが、付近を流れる石神井川から汲み上げて使うことになった。商品としての製紙が始まったのは明治8年の初春の頃であった。大量の地券用紙の注文があり経営は軌道に乗った。紙すきが始まった頃は技術的トラブルがあり、苦闘したことが記録されていた。当初は「抄紙会社」であったが、明治26年11月には「王子製紙株式会社」に変更した。主要銀行は当初は第一国立銀行であったが、明治29年には三井の経営人脈が経営実務を進めた。

八、金融と実業、そして商工会

青淵は明治6年に大蔵省を退官し第一国立銀行を創立したが、そのときの経緯が複雑である。当初頭取が2名いた。三井八郎右衛門と小野善助であり、青淵が監査役に収まり2人の間を纏める役であった。ところが明治7年になって小野組が破綻した。小野組の番頭役に古河市兵衛がいて危急の場面を救済してくれた。その縁で古河市兵衛が足尾銅山の経営に乗り出したときには第一銀行と相馬氏、古河市兵衛の3者で10万円の拠出で合資会社として足尾銅山を発足させた。相当な胆力がなければできないことだ。

金融機関の初期運営が軌道に乗って、貸し金利息収入に余裕が出てくれば銀行業は安泰だが、資金の流れが滞ると取り付け騒ぎの危険がある。貸し出し先実業、つまり銀行の客筋経営を見守り経営指導が求められる場合もあろう。それは銀行の仕事ではないが、そういう場面を救うのが商工会議所などの実業運営機関の役割である。青淵はそうした場面で官僚と諸実業家との連携を司ることが巧みであった。青淵の伝記をひもとくと相当に危ない場面もあった。それを乗り切れたのは神道無念流剣法で得た胆力と儒教的智恵とフランス出張で得た外国人と対等の交流で得た度胸と実業的自信、そしてまた藍玉製造販売で培った営業的自信ではないだろうか。全ての場面で得た経験が実業人青淵を支えていた。実業社会が安定に運営されていれば社会全体の価値創造は繁栄し、それが国力となることは自明である。幕末明治期に青淵が描いた国家像は経済的に我が国を安泰にするということであった。その方法は金融業と諸実業と間を取り持つ要である商工会であり、銀行の頭取であると共に商工会の頭取に収まったことは当初からの目標であったと考えられる。

九、日米委員会と青淵

　生涯に、470社以上の実業会社を創立した。そして青淵77歳で大正5年（1916）に実業界から引退したがそれでは終わらなかったのである。前年大正4年（1915・4）に日米委員会を発足させ商工会議所のメンバーを動員して日米相互理解、親善外交を展開し、人種差別や日貨排斥運動を沈静化したかった。しかし当時のアメリカ大統領はユダヤ資本を背景に持つ第28期ウッドロウ・ウィルソンの時代だった(11)。彼は国際連盟で日本が提出した人種差別撤廃法案を否決した人で、親日的とは言えなかった。しかし日本は第1次世界大戦（1914～1918）に連合国側の一員として参戦していた最中だし、貿易相手国としてもかなりアメリカ経済に貢献していた。同年12月には青淵らはウイルソン大統領を表敬訪問していることが『青淵回顧録』に記載がある。したがって初期の財界としての訪問は成功していたと思われる。しかし当時既に日本を仮想敵国とするオレンジ作戦計画は国防省で検討がなされていた。旧約聖書的世界観から見れば大和民族は油断ならない相手だとの認識がアメリカ側にあった。当時の日米会談の雰囲気は分からないが、おそらく緊張した様子であったと推察される。青淵達、訪米調査団の帰路船中での考察を推量すればただならぬものがあったであろう。

　その危惧感が上記の日本側委員には残ったと思われる。青淵は既に国内産業界の資本主義的発展は峠を越して、次なる課題は如何にユダヤ的資本侵略と戦うか、という方向転換が急務だと考えたと推察される。その結果の決断は日本の潜在的国力を増進させる科学立国と人財育成に集中すべきと構想し、諸々の柵を払い財界を退陣する覚悟を決めたと思える。

　青淵は慶応3年のフランス出張の後、20世紀になってから4度ほど調査団を組織して外遊しているが、その都度各国の政界人や実業界の要路と会談を重ねていた。その都度帰国後に関係筋で講演、報告され、要旨は『青淵回顧録』などに残されている。欧米滞在時に実業界の要人が自らフリーメイスンであることを告白され秘密の文書を青淵に紹介していたことが回顧録にある。青淵が日本実業界の筆頭者としての信用がそれを可能にさせたと言えよう。青淵は内心、「化け物が現れた」と気づいたであろう。しかし、無念流達人青淵は静かにその紳士の言葉を聞いたのだ、かつて南州と語った一神教の現実の姿を目前にしたのだ。帰国後青淵は宗教関係者を招集して国防の観点から我が国の宗教界、精神教育界を糾合する運動に着手した、大正元年に日本女子大学創立者成瀬仁蔵氏らと共に帰一協会を設立した。ここを舞台に思想界を改善する活動を興したが、我が国の斯界の状況が整わず発展はしなかった。

　大正5年に財界を引退しても青淵には様々な仕事が残っていた。引退後の事業として3つを選んでいた。「一、道徳経済の合一」「二、資本と労働の調和」「三、貧困者救済の事業」。このほか隠れた事業として「四、真の国力開発」があったと想像できる。一、の問題は資本主義の本質的矛盾である「利子と欲望」であり、これの解決は今後の世代へ残された。二、の問題の本質も資本論理と労働問題で難しい問題だが、「協調会」という事業団体が引き受けることになった。三、の問題は青淵が明治5年に取りかかった養育院に関連した慈善事業である、これはしかし多数の後継者が引き継いでくれた。四、の問題は国際的に微妙であるので表には宣言しなかったのだと思える、理化学研究所の創立と真の実業教育機関の設立であった。

　青淵が引退後纏めた大きな仕事として、『徳川慶喜公伝』の編纂があるが、これは明治2年頃から編集者に萩野由之博士を得ていたので順調に進み、大正7年には公刊になった。

　二、の「協調会」は青淵と旧静岡藩主徳川家達が主唱して成立した財団である[12]。労働者と資本家の造られた闘いが始まり、資本と共産主義イデオロギー対決の場が生まれた。青淵が発案した緩衝機構と言えるだろう。旧内務省の外局として活動する団体で、労働問題の研究調査、社会事業などを担当していた。一時期港区麻布に事務所を構え職業実務に関わる教育・訓練などを実施していた。中央労働学園という学校組織が立ち上がり、講師は東京工業大学から招聘されていたこともあった。戦後GHQによる労働パージ（労働争議への不当な干渉と見なされた）があり、この機関は廃止となるが、職員や資料は法政大学や産業能率大学へ引き継がれていった。その人脈の流れが後日、厚生労働省の外局であった旧雇用促進事業団へ受け継がれ産業界底辺の実際的な実業教育機関がそこで育ったのである。そして昭和33年には労働省外局として中央職業訓練所が小平市小川に設立され、さらに発展して現在の職業能力開発総合大学校に到り、全国的な職業実務訓練の組織ができあがった。しかし全ての出発点は青淵の『論語と算盤』の思想から流れ出でたと言える。

　四、の事業はあまり注目をひかないが、皇室の助成もあって青淵の飛鳥山の自宅に近い駒込に設立された財団法人の理化学研究所で全国の秀才を集めて様々な理化学的研究が実施され、一部は実用化され事業化された。理学博士仁科芳雄を中心にした原子科学研究グループは一時期世界的先端にいた。原子力研究も進められたが戦後GHQにより研究施設は東京湾へ破棄された経緯がある。

　冒頭にも記したが、青淵の飛鳥山の自宅下に台地があり、そこに府立商工学校が設立されたのは大正9年で、昭和10年に東京板橋へ拡張移転した。技術実務教育に重点をおき、青淵が設立発起人となり、氏の推薦で初代校長は熊本藩士菊池午之助、教諭は東京工業大学卒の佐藤孝次で発足した。青淵を主唱者とした財界の寄付があり設備を充実して、昭和15年頃から松陰思想に基づく「生産実習」が実施され有能な技術職人を輩出した。その伝統は現在も後継校、北豊島工業高等学校に受け継がれている。

十、国際政治・生存か死か

　日米委員会は10年後の大正14年、太平洋問題調査会（日本IPR、Institute of Pacific Relations）へ発展する。設立当初は青淵が評議会会長、日銀総裁井上準之助が初代理事長に就任した。旧日米委員会の日本側メンバーは変わらなかった。次いで昭和4（1929）年に京都会議があり、朝鮮代表参加問題でもめた。議題は国際親善活動から発展し国際政治経済分野へと拡張されていき、その後、蠟山政道、牛場友彦、松本重治ら若手左翼系メンバーが参加し「東京政治経済研究所」が立ち上がり、彼らは近衛文麿の側近になった。アメリカ側はロックフェラー財団から資金が提供されるようになりアメリカ左翼系メンバーの参加があり、昭和18（1943）年5月には敵性機関として解散された[13]。青淵が意図した国際親善活動は左翼陣営に占領され、日米対立を促進する方向へ発展したのは意外な結末であった。旧約聖書的な世界観が世界に底流しているのだ。

　近衛文麿は伝統のある裕福な藤原家の当主であったが京都大学で左翼学者河上肇に師事し、共産主義にかぶれたことが

知られている。かれは昭和12年の第1次近衛内閣から第3次内閣16年まで首相を務め、内閣の人事を好んで左翼系メンバーで固めていた。最近の研究では近衛はソ連共産党政権に近い独裁政治運営をする意図をもっていた。昭和天皇に彼の意図は拒否され、曖昧な形の大政翼賛会という政治形態が実施されたが、同じくアメリカのルーズベルト政権も取り巻きはユダヤ思想の共産主義者で固められていたことが最近の研究で明らかになった。日本もアメリカもコミンテルンに操られていたのだ。日・米はコミンテルンに操られて戦争という殺し合いをして終った(14)。

なぜ共産主義が世界に拡散したのか。その謎をめぐる研究と現在アメリカと中国共産党の確執が続いている現実を如何に評価し、平和に解決するか真剣に考究することが求められる。さらに驚くべき事実は資本主義という経済・社会思想とそれに真っ向から戦うと考えられていた共産主義は、根が同じものであるということが判明したのである。それらの事実はルーズベルトを批判していた前任のハーバート・フーバー大統領の最近公表・出版された回顧録に記載されている。アメリカでも正統派歴史学界が吃驚仰天しているが、戦後70年の日本国内の政治・社会思想の混乱が酷い。戦後の占領期間に行われたGHQの諸政策は見直さねばならない。この70年間オレンジ作戦が継続し日本民族が消滅する方向へ誘導されてきた様々な社会政策の結果、様々な社会問題が顕在化しているが、これこそ青淵が最も危惧した恐怖した現実なのである。簡単に言えばアメリカ人はやや粗忽な側面があるようだ。GHQのメンバーであったとされるユダヤ人モルデカイ・モーゼ氏の著作『日本人に謝りたい』を見ると、彼らにしても理想的で平和な日本人社会を誤解して悪魔国と考えて終ったのだ。それで最も友好的な同盟国、大和民族を滅亡させる構想を練ったのがオレンジ計画であった、という恐ろしく、かつ愚かで漫画的な政策を1世紀近く続けたという結論であった。青淵が危惧した恐怖の事態が現実化しているが、このできて終った災厄を克服する努力は後輩である現在の日本人の肩に載っているのである。

参考文献

1、大川時夫：北豊島工業高等学校の生産実習技術史教育学会誌　第1巻第1号　2003年
2、和田　英：富岡日記　筑摩書房　2014年
3、網野善彦：日本中世の百姓と職能民　平凡社ライブラリー　2008年
4、大川時夫・堤一郎：吉田松陰と横井小楠の実業教育について　職業能力開発研究第23巻　2005年
5、宮崎政弘：西郷隆盛　㈱海竜社　2017年
6、東京工業大学編：東京工業大学百年史　1985年
7、H・ダイアー　平野勇夫訳：大日本　実業の日本社　1999年
8、渋沢栄一　編訳者　守屋淳：渋沢栄一自伝　平凡社　2012年
9、幸田露伴：渋沢栄一　普及版、幸田文編露伴全集第17巻　岩波書店　1949年
10、鹿島茂：渋沢栄一（算盤編）（論語編）㈱文藝春秋　2001年
11、西尾幹二：GHQ焚書図書開封5　㈱徳間書店　2015年
12、労働省編集　労働省史　2001年
13、林千勝：近衛文麿　野望と挫折　ワック出版　2019年
14、馬渕睦夫：国難の正体　㈱総和社　2012年

（2019年12月12日・公開フォーラム）

筆者略歴（おおかわ　ときお）

東京浅草生まれ。鉄工所・理化学機器製造会社など現場仕事に従事。東京都立北豊島工業学校機械工作科卒業。都立大学理学部物理学科卒理学士。X線工学研究にて工学博士。職業訓練大学電子工学科教授。厚生労働省技能検定委員など歴任。現在日本電子回路工業会営業技能検定委員、日本機械学会正会員、日本技術史教育学会顧問。